資源環境経済学特別演習 II 議事録（ 5 月）

２０１１ 年 度 第 １ 回

報告題名　最上町の農業所得の安定を図る ～アスパラガス生産の取り組み～	
報告者　高橋　明彦	**日時**　5 月 26 日　午後 3 時～
（**所属分野**）　フィールド社会技術分野	**場所**　第 2 講義室
座長　水木麻人	**議事録担当者**　泉井亮平

出席者

木谷、小山田、米倉、冬木、高篠、伊藤(房)、石井、韓、スチン、八木、水木、宮里、池田、易思、威廉、王(毓)、金(喆)、滝田、覃、中村、堀、山口、林、泉井、Intan、Sudirman、Lies、高橋、金(銀)、黄、渋谷、室井、慧、徐、趙、Manalo、劉、王(偉)、井坂、伊藤(まき子)、佐藤、庄司、丸林、門馬

報告要旨

最上町は、平成 15 年にヤマセの影響で、水稲に大きな被害を受けた。過去のデータから見ると 5 年に 1 度ペースでヤマセの影響を受けている。このことは、最上町の農業経営に大きな影響を与えている。また、米政策では近年所有水田面積の 40%を超える生産調整を強いられている。このヤマセと生産調整 40%による農業所得の減収をカバーするために、アスパラガスを導入し、平成 16 年から定植し平成 17 年から収穫を始めた。平成 22 年で収穫年数 6 年になる。はたして、アスパラガスは、最上町が目指そうとしていた、農業経営の安定をもたらしたかを、米との販売額との比較や、生産者からのヒアリング等で、米との販売額の比較等を行い、アスパラガスの優位性等を比較検討し、アスパラガスが農業の安定を図ることができたかを検証した。

質疑・応答

水木：最上町の取組の中でどのような利点があってアスパラガス生産を選択したのか？

高橋：アスパラガスは多少気温が低くても生産ができ、一度生産を始めると 10～15 年という長い期間で収穫ができる。その間、圃場を掘り起こす必要もなく安定的に収穫ができるだろうと考えたため。また畜産農家が多くいるこの地域での堆肥の処理を考えて、はじめに圃場を整備するときには 10a あたり 30t、次の年から 10a あたり 5t の堆肥を投入すれば約 4000 頭分の堆肥処理ができ、循環型農業が実現できる狙いもある。

池田：ヤマセが最後に来たのは H15 でアスパラガスの生産を開始したのが H15 以降では、アスパラガスの生産と農業所得の安定化を直接結びつけることは出来ないのでは？また米とアスパラガスの生産をすることで農業経営の取り組み方が変わってきているのではないか？そのことが災害に対応できるのかわからない。

高橋：リスク回避を考えて米のみの生産ではいけない。米+αの生産体制でなければならない。ただし H15 以降ヤマセは着ていないので関連性に関しては未知数である。また農業経営が変わっているということだが、この地域の集落の人たちの中には米の生産以外を農業と認めない方もいるが、収入安定のために園芸農業を受け入れてきているという意識もある。生産者にとって農業経営は変わってきている。

木谷：競争に負けないようにブランド化が必要ではないか？

高橋：ブランド化は必要。最上町のアスパラは色づきが良く高い価格がつく。これをブランドとして確立させていきたい。

木谷：品質の違いではなく、イメージを売るといった感じで成功するのではないか？せっかくなのだから最上牛を利用した宣伝方法などやってみたらどうか。

冬木：産地で比較してみると、最上のアスパラ生産の特徴が浮かび上がる。また H15 以降に生産を始めて、まだ一回転していない。引継ぎの部分や労働力の観点から検討してみたほうが良い。

高橋：ありがとうございました。